

北海道二村落の作業被服形態の調査

—— 札幌市西岡地域・雨竜地域のモンペの形態について ——

An Investigation on the Forms of Working Clothes
at Two Villages in Hokkaido

—— Monpe Forms at Nishioka and Uryu Areas in Sapporo ——

澤 田 幸 子 石 垣 和 子
Sachiko SAWADA Kazuko ISHIGAKI

I はじめに

北海道の生活文化は、道外の伝統的社会から、多様な生活文化を担った人々の移住によって形成され、開拓期から現在に至る歳月の間に、融合、変容しながら発展、衰退を逐げ、今日の特色ある複合文化を築きあげたといえる。これらの生活文化の実態を総合的、且、体系的に把握する事を前提として、北海道みんぞく文化研究会（主宰、札幌大学教授 宮良高弘）が発足し、衣、食、住をはじめとするさまざまな生活文化の各分野毎に、調査がすすめられている。本研究は、この総合調査の一分野である衣の領域から、二村落の衣服の実態を調査し、北海道における衣文化の特質を探る事を目的とした。

II 調査方法

調査は札幌市西岡と雨竜町の二村落を対象地として取り上げ、明治、大正、昭和に亘る被服の着装形態、材料、縫製など、高齢者からの聞き取り調査を中心に実物資料や写真などに基づいて考察した。今回はその調査の中から、農作業に欠かせない女子の仕事着としてのモンペの形態及び、地域的偏差について報告する。両地域とも資料となる被服類（モンペ）は残存せず従って、高齢者からの聞き取りを頼りに復元した資料によって考察を行った。

III 結果及び考察

1. 地域の概況

(1) 札幌市西岡地域の概況

西岡地域の開基は明治20（1887）年頃といわれているが、明治から大正にかけての入植状況は本州の県別にみると、福井県が最も多く次いで富山、広島、兵庫、更に少数ではあるが、徳島、鳥取、山口、岩手、宮城、新潟の順位である。この内訳は、福井県32名、富山県19名、石川県15名、広島県12名、兵庫県6名とこの5県の入植者が大半を占めている。しかしこれ等の人々は同時に直接入植しているのではなく、他地域に入植した後に、個別に移住しながら形成

された地域である。

札幌市の南東部西岡は東西約1km、南北16kmの緩やかな傾斜を持つ台地である。明治21年の秋、5戸、12人によって当時、焼山と呼ばれていた原始林が開墾されたが、拓いただけ自己所有の財産になるという事で、開拓者達は、夜を日に継いだ苛酷な労働ではあったが、張り合いのある毎日であったという。最初の生業は、森林の伐採によって得た薪や炭の製造で、開かれた耕地には、裸麦、じゃがいも、粟、いなぎび、とうきび、豆、えん麦などが作られた。

稲作が本格化したのは、大正3年頃で、米作りへのあこがれは強かったが、灌漑用水の確保がむづかしい自然条件のために、不可能となり、紆余曲折を経て、じゃがいも、人参、りんごなどの畑作へと再び転換していった。西岡地域の農業で見落せないのは、肥料の確保で、古くは明治末期に月寒の歩兵25連隊の汲み取りを行ったのが大量に使った始めといわれている。大正から昭和にかけて、札幌市の清掃事業との関わりあいから、人糞運びが生業の一つに加えられ、農閑期である冬期間が主な搬入の時期にあてられたという。以上のように、純農地帯であった西岡が、昭和36年、札幌市と合併したため、農地の宅地化とともに、交通の発達によって都市化の一途をたどり、生活の改善が大きくなされ、現在に至っている。

(2) 雨竜町の概況

雨竜町は札幌市から北東へ約100km、石狩川とその支流である雨竜川との合流点に存在している。東に妹背牛、江部乙町、西に増毛町、南は新十津川町、北には北竜町と五つの町に囲まれ、石狩川と尾白利加川にはさまれた扉状丘陵地帯である。

雨竜の開拓は、明治22(1889)年、公爵三条実美らによって華族組合農場が組織され、雨竜原野1億5千万坪(5ha)の貸付を政府に出願し、許可されアメリカ式大農法による経営を行った。しかし未開地での開拓と、農業経営の両立はむづかしく、明治24年に三条実美の死によって、更に経営は悪化し、明治26年、遂に華族組合が解散となった。その結果、華族組合が解散した時の共同経営者達は、その出費額に応じて、成墾地財産の配分を行い、蜂須賀、戸田、町村の農場が誕生した。このような背景をもつ初期の移住状況は、母村を単位とする集団入植であった。はじめは徳島県人の大量の入植をみるが、それに次ぐ新潟県人の移住は徐々に増加の傾向を示し、その後の明治36年頃は、それまで少数の移住であった富山県人が急速に増加し、他出者の多い徳島県人を追い越している。このように母村を単位として時間的にずれながら形

図1 調査地域



成されている所に当地域の特徴がある。当地域が畑作から水稻栽培に移行したのは、明治32年頃で、この頃から畑作、牧畜だけでなく水田耕作をはじめ、明治37年には灌漑工事が完成し、本格的な稲作となった。その後、明治末期から大正、昭和に亘って、小作農法による経営が行われたが、戦後の農地改革により、自作農に轉換し、現在では1戸あたりの所有面積が、7町から10町歩位の純農村地帯である。(調査対象地・洲本、豊里)

2. モンペの発生と変遷

袴は現在、民間の服飾として存在するが、その一種である山袴は農山村などで日常着または、農耕その他の作業時に着用される被服である。山袴を形態上分類すると、モンペ、タツツケ、カルサンの三種類に大別される。モンペは左右一対の前布、後布から構成されている四布型のもので、後裾が発達して三角型の底辺が裾まで達しているもの、タツツケは膝下が細く、膝下から前巾一巾で作られているのが特徴で、カルサンは、後布大きく裾に襷をとってくり、横巾に筒状の裾つぎの入っている型のものである。これらのものは、民間の日常着または作業着として、古くから日本の各地で着用された。

モンペの名称が文献にあらわれたのは、明治21年代の西村天因氏による紀行文「雲の行方」がはじめてといわれ、同書には既に漢字で門閉と記されている。モンペイの語の由来については、紋平という人が最初にはいたのでその名がついたとする説があるが、これが山形の人か、米澤の人かその出身地がさだかではなく、したがって現在でも民間の語源説にすぎないと考えられている。モンペイはその語尾をのばして、モンペーと呼ばれるもの、更に語尾が濁って、モンペとなったものやモンパ、モンピなど、さまざまな呼称があるが、いづれにしても股引(モモヒキ)の語の変化したモッペという方言からモンペと呼ばれる様になったといわれ、股引の語に由来するものである事が明らかである。

モンペは一部の地方で男子も用いたが、一般的には女子が着用している。これは、モンペの形態が全体的にゆるやかに作られているため、長着のまま着装することが可能で、家庭婦人が、これを着用して行商に出かけたり、農作業に従事したり、寒い雪国などでは、保温にも役立って非常に便利な被服として着用された。また第二次世界大戦前後には、足さばきの悪い和服の下衣として、防空着、作業着として、婦人団体などが、モンペの呼名で、製作、着用を大いに奨励した。昭和15年には男子は国民服が、女子は2年おくれて昭和17年に標準服が制定され、戦時体制下の非常服として、東京などの都会をはじめ広く全国各地に普及していったのである。

北海道にモンペが移入されたのは、それ程、古い時代ではない。先住民族のアイヌ族が、モンペをはかなかつた事は、モンペの元祖である山袴が分布圏外に属している点によって推測され、開拓のはじまった明治10年以降、移住者達によって他の衣服と共に本道に持ち込まれたものと考えられる。明治40年頃、大分県香々地出身の宇都宮高学氏は、布教のため来道し、石狩平野の中央地にお寺を建立したが、布教の他に夫人の協力を得て、本堂で裁縫教授をはじめ、婦女子の教育にあたったという。この時の指導者のスナ夫人は、福井県出身の北国育ちのため、労働着または防寒着としてのモンペの制作や着装などを熱心に指導されたといわれている。当

時の北海道は、各地からの移住者の集りで生活様式もさまざまであったが、はげしい労働や、寒冷地というきびしい気候条件の中でそれらに適する被服としてのモンペに改良工夫を重ねた結果、広く全道各地に普及し定着していった。

3. モンペの材料と色柄

モンペの材料は、一般的には木綿地が最も多く使用されたが、麻地や藤布なども使われ、古くは、タツツケ、カルサン型式の山袴には、鹿の皮や犬の毛皮なども使用されたことと記されている。現在では木綿地が多く、セル、サージ（化繊）、コール天（厚地木綿）などで作られているものもみられる。色については、古くは白無地や浅黄色などがあったといわれ、近年は紺または黒の無地が殆どである。柄は縞物、或は緋などが使われている。

4. 二村落におけるモンペの形態

明治末期から大正初期にかけて西岡、雨竜両地域ともに、女子の作業着としてモンペは着用されていない。当時西岡地域の農作業着は、男子は木綿のシャツに股引、女子は対丈の着物を短かく着て、下にお腰を出し裸足またはさしたびをはき作業をした。同時代の雨竜においても、殆ど変らない着装形態であったという。しかし両地域とも入植当時は、開墾のために樹木の伐採という男仕事があり、特に積雪の多い冬期間では、黒または黒っぽい木綿のモンペをはいて、山仕事に従事している。西岡部落史によると、西岡では大正7年に女子がモンペを着用すると記されている。入植当時から大正中中期まで、男の山仕事時に着用されていたモンペは、大正7年頃から女の仕事着として着用されはじめ、男子の着用者は次第に減少し、昭和に入ると、男子は殆どズボンとなり、モンペは女子の被服として完全に定着する。雨竜地域では、特に記述されたものは残っていないが、古老の話によると、西岡とほぼ同時代にモンペが穿かれたといっている。次に両地域によるモンペの形態を年代別にまとめてみた。

(1) 西岡、大正中中期～昭和初期

図2は西岡地域において大正中中期から昭和初期にかけて着用されたモンペである。父親が、石川県、母親が福井県出身という西岡に住む77歳の古老からの聞き取りにより復元したものである。当時の西岡は30戸に満たない部落であったという。現在、64歳から87歳までの調査者達の殆どが、この形態と同じモンペを穿いたと回答しており、その当時の畑作、稲作、果樹栽培などの作業全般に着用されている。この型式は

図2 西岡1 大正中中期～昭和初期

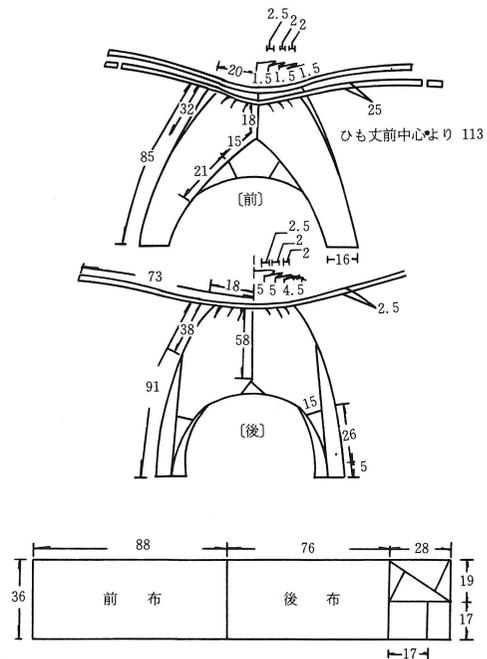
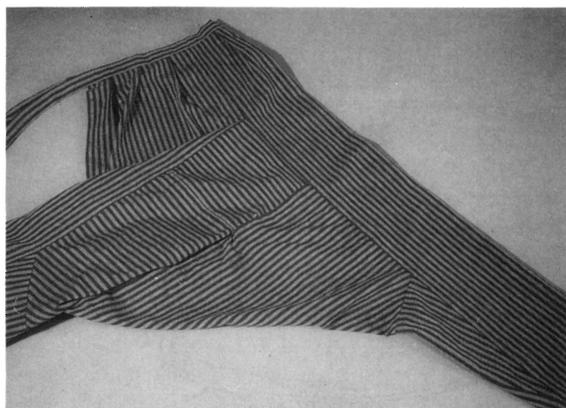


写真1 図2 西岡のモンペ



写真2 図2 襠の形態



腰の部分がゆったりして、膝から下が前巾一巾で作られているのが特徴である。本州においては、主に中部地方及び、その周辺の地域で穿かれているもの

で、タツツケ、タチツケの種類に属するものと同型である。福井県丹生郡越前町では、この種のタツツケと殆ど同じ型式のものをカリサンと呼んでおり、長野県戸隠地方では戸隠モモヒキ、またはサルモモヒキと称している。男女共に用いており、男子の場合は前襠の部分に小用のための明きが作られている。また、岐阜県揖斐郡久瀬村（美濃の西部）ではブタモモヒキ、茨城県久慈郡地方及び、富山県地方ではタツケと呼ばれるなど同じ型式でもあっても地域によって異った呼称がつけられている。

西岡地域の入植状況は概況でのべた様に、さまざまな地域から時間的にづれ乍ら入植しているにも拘らず、モンペの型式については、福井、石川県出身者が着用したものと同型のものが穿かれており、呼び名も一様にモンペと称し、それぞれの出身地である母村の呼び名は使われていない。しかし部分的な呼称、例えば襠については四角襠をマス、三角襠をシコと呼ぶなどの伝承は見られた。その他、一般的には正方形のものをハコマチ、カクマチと呼び、三角形のものをヒウチマチ、ササ（仙台）、マシコロ（秋田、能登）の呼称もきかれた。

図3は、西岡地域近郊のモンペで、図2と殆ど同じ構成である。中央に入っている正方形の襠（マス）と、脚の後側に入っている三角形の後襠（シコ）は、着用者や製作者によって寸法に差異があり、また一部に構成上の違いがみられるが、図2、図3とも労働時の運動量を十分に考慮した型といえる。同時代に、西岡地域にとどまらず、札幌周辺一帯ではかれた形態のものと思われる。写真2は襠の形態であり、写真3・4は襠の形態の差異である。

(2) 雨竜 大正中期～昭和初期頃

図4は、上記の時代に雨竜で穿かれた短かモンペである。丈は膝下5～6cm下位で、畑作、稲作時に着用された。このモンペには脚絆を付けたが、水田に入る時はモンペの上に脚絆を付けその紐で、結んでいる。当時雨竜において、短かモンペがよく穿かれているのはこの地域が、

図3 西岡近郊2 大正中期～昭和初期頃

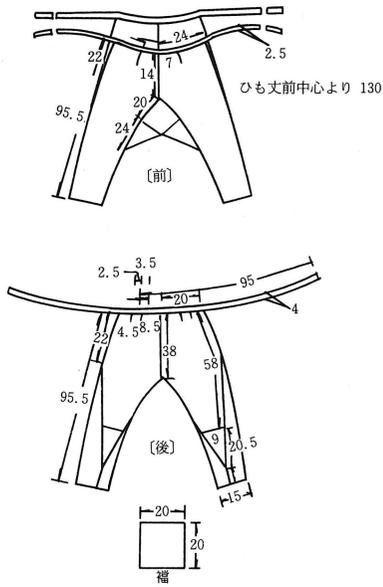


写真3 図2 襠の形態

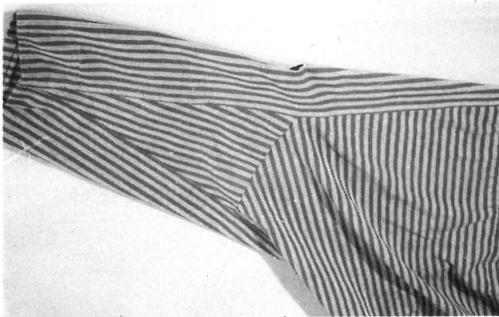


写真4 図3の襠の形態

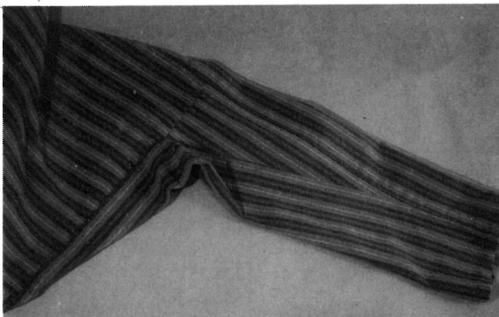


図4 雨竜1 大正中期～昭和初期頃

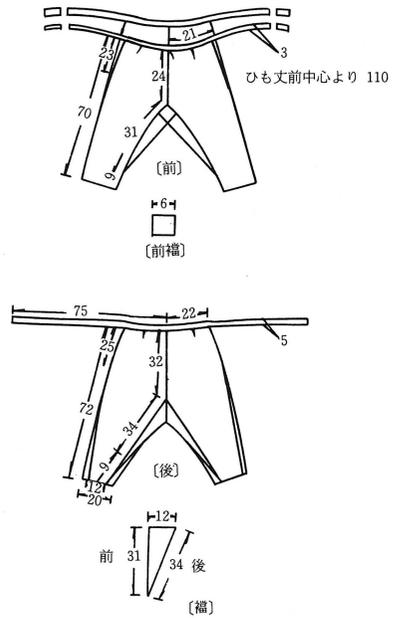
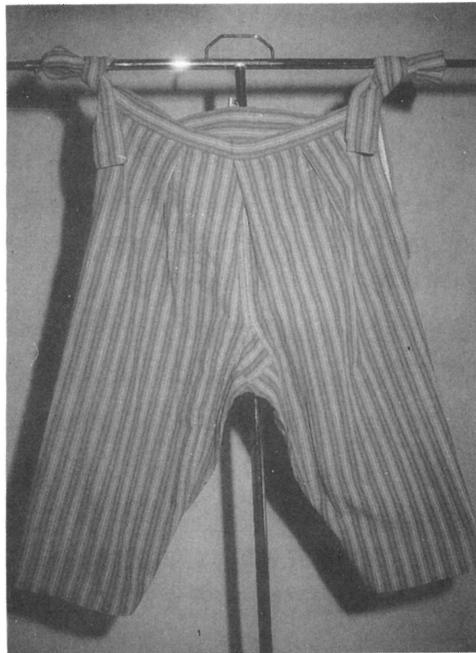


写真5 図4 雨竜の短かモンペ



稲作地帯であったためであり、この型式のモンペは、水田用のゴム長靴（昭和初期頃）が出まわるまで着用されている。また同形態で、足首まであるモンペも穿かれているが、極めて少数であった。長い丈のモンペを持参して嫁いで来た若妻が、近所の人達を見て、早速、短い丈に作り直したという話も聞かれた。丈の差はあっても同じ型式のモンペは、本州においては、東北、中部、関東は勿論のこと日本全地域に亘って着用されている。裁断は後モンペの襠を三角形に欠き取りこの布を襠として股下にはめこみ、中央に6cmの正方形の前襠が入った構成で、いわゆるモンペの系統に属する形態である。これは裾巾が細いために農作業に従事する上に、極めて機能的であると同時に、布が経済的である事、更に裁ち方、縫い方が簡単であり、これらの要素は、労働にあけくれた当時の貧しい開拓民にとっては、大きな利点であったといえよう。

この型式のモンペは、新潟県東頸城郡地方、及び福島県地方ではモンペと呼ばれており、茨城県久慈郡地方ではモンペイ、山形県庄内地方ではタツツケ、サルバカマ、タツプラなどと多様に呼ばれているが、一般的には本州においてもモンペと呼称する地域が多い。この短かモンペはおもに、新潟、及び青森県地方の農耕、特に稲作地帯の人々に着用され、温暖な徳島県地方では、パッチと呼ばれる短かい股引きが穿かれているところから、これが混合され、短かい丈のモンペとしてこの地域により多く普及したものと考えられる。

この種のモンペは、同時代の西岡においては全く使用されていない。

(3) 雨竜 昭和初期～昭和10年頃

図5は、上記の年代に雨竜地域で穿かれたモンペである。

写真6 図5雨竜のカクマチモンペ



図5 雨竜2 昭和初期～昭和10年頃

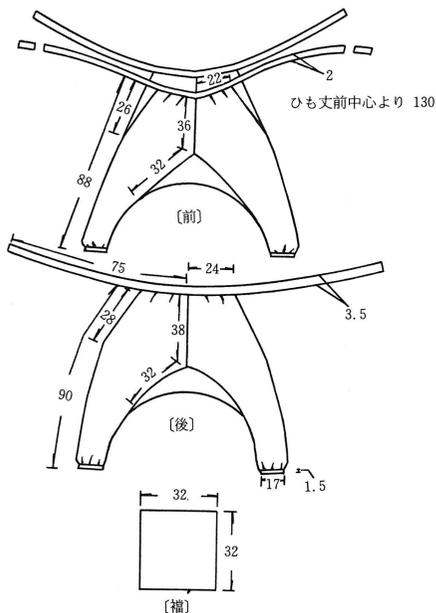
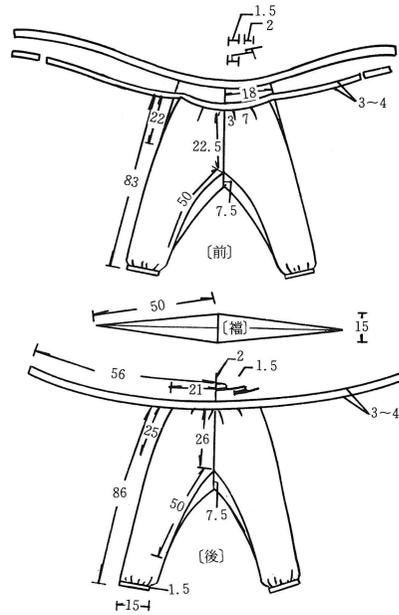


写真7 図6の西岡のモンペ



図6 西岡3 昭和10年頃～昭和20年前後



この時代になると、襠の型が単純化してきて、並巾大（36cm）の正方形の襠を入れている。この襠は股下がすっきりしないので格好がよくないといわれ、長つづきしなかったという。しかし縫い方は簡単で手軽に出来る利点もあり、年配者に多く穿かれ、長着の裾がすっぽり入るので作業着の他に、外出着にも着用されている。この形態は新潟、佐渡地方に多くみられる。時代は逆だが今から1200年前（寧楽時代）の衣服が奈良の正倉院に保存されており、その中の禪の襠は正方形で一尺四寸、信濃、木曾のカルサンの襠と比較すると形や大きさ共に一致するという。図5の襠は上記二例の襠よりやや小さ目ではあるが、一尺一寸とほぼ同型である。尚、作業着とは別に入植以来当地で行われている獅子舞衣裳のモンペにも同型の襠が扱われている。

(4) 西岡 昭和10年頃～昭和20年前後

西岡地域ではこの年代になると、次第にモンペの形態に変化が見られ、従来の複雑な構成から単純化し、洋服のズボンに類似したものに移行してきている（図6）。これは当地域においてもこの時代の前後から、徐々に和装から洋装に変わりつつある過渡期であったための影響といえよう。裁断は、並巾から三角型に欠き取り、その布を逆方向に扱って縫い、股下の運動量を出している。布地を合理的に無駄なく使用しており、尚この襠の中や丈は、着用者によって、差異がみられた。概況で述べたように、西岡の冬仕事に、人糞運びと称する男仕事があったが、主婦も札幌市内まで馬糞で人糞汲みに出かけたり、春先には夫婦で人糞まきを行った。この場

合、着用されるモンペの裾は極端にせまくて、この特殊な作業に支障のないよう考案されている。この生業は大正初期から昭和30年頃まで続いたが、当所は、図1・2に見られる裾巾の細い膝下のぴったりしたタツツケ型のものが多く穿かれたが、昭和の初期頃、ゴム長靴が出現すると、図6のように裾巾のやや広目のものでもゴム長靴を使用する事によって、容易に作業が行われた。

(5) 雨竜 昭和10年頃～昭和20年前後

図7は、図6と殆ど同型の細長い菱型の裾が扱われているが、裾口は従来のふくりんの仕末からゴムを入れて縮めた方法に変化している。昭和16年、第二次世界大戦の開始と共に、国民生活も窮迫し、統制と配給の日常生活となった。雨竜においても物資が不足しはじめ、衣類の入手も困難となり、女子は手持ちの和服を更生して、当時、政府が奨励した上下二部式の標準服を作った。この標準服の上衣は、着物丈をつめ

図7 昭和10年頃～昭和20年前後

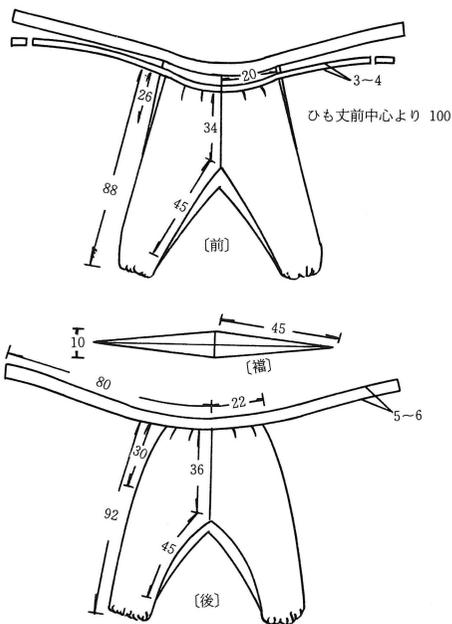
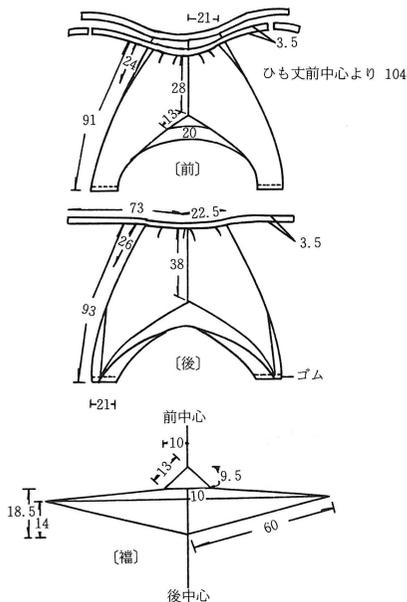


写真8 図8の西岡のモンペ



図8 西岡4 昭和25年頃～現在



て腰丈とし、袖は元禄袖で、下衣は図7にみられるようなズボン形式を取り入れて活動的なものであったが、縫製は和服の技術で仕立てられたのが特徴であった。また前述したように、戦中、戦後を通して最もモンペの需要が多かった時代でもあった。

(6) 西岡 昭和25年～現在

西岡地域では、戦後から現在に至るまで、菱形の褶と共に使用されてきたモンペの形態は、図8に見る事が出来る。後モンペに左右の裾から裾まで、一枚つづきの細長い大きな三角褶を、前モンペには図のように小さ目の褶を入れ、この前後の褶を組み合わせて構成されている。福井、長野、愛知地方に、これと同型の褶が見られ、また岐阜県郡上明方村地方では、この型のモンペを「ののダツツケ」と呼んでいる。「ののダツツケ」とは麻を手でのべて、手織りにしたもので、地織り麻地、紺染め無地、後布小さく裾は一巾で裾には2.5～3 cmの明きがあり、わらじを穿く時に便利と記されている。「のの」とは麻の事で本州では、古くから穿かれていたものである。本道でも大正の初期頃から現在に至るまで持続して使用されており、当地域の着用者の母親は福井県の出身である事からみても、母村の形態を完全に継承した例といえよう。しかし「ののダツツケ」の呼称は残されていない。

(7) 雨竜 昭和25年～現在

図9は、雨竜地域における現在の既製服に扱われているもっとも単純な菱形の褶ののの入ったモンペである。図6、図7と同じくズボンの構成に類似しながらも股下の運動量は充分に入っている。北海道では昭和35、6年頃より既製衣料が出回り、最近では雨竜でも従来の手縫いモンペは殆ど姿を消し、大量生産によるミシン仕立てのものが市販され、容易に入手できる現状である。更に、女子の作業着は完全に洋装化し、若い女性から中年層まで、トレーニングパンツや、ジーパン類を着用し、モンペ姿は年配者に見られる程度である。

写真9は、雨竜における千歯を扱って（千歯こき）の作業時のもので、この作業は大正の初期頃から昭和初期頃まで続けられた。男女とも作業着の下はモンペを着用している。

写真10は、雨竜の昭和18年頃のものである。戦時体制下の服装は男は国民服か軍服を、女は和服の代りに標準服を着用した。中央の主婦は銘仙の和服地を更生した標準服姿である。

写真11は、西岡地域の畑作業時のもので、現在でも年配者は、手拭、半纏、モンペ、長靴の着装で仕事に従事している。

図9 雨竜4 昭和25年頃～現在

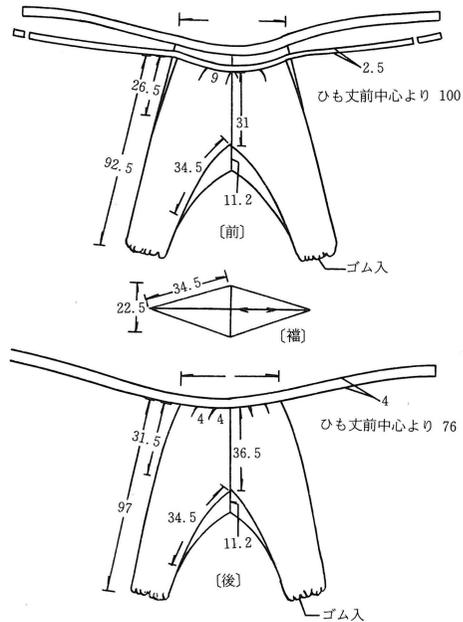


写真9 雨竜における千歯こき風影（大正初期）



写真11 西岡地域における
モンベ姿（現在）

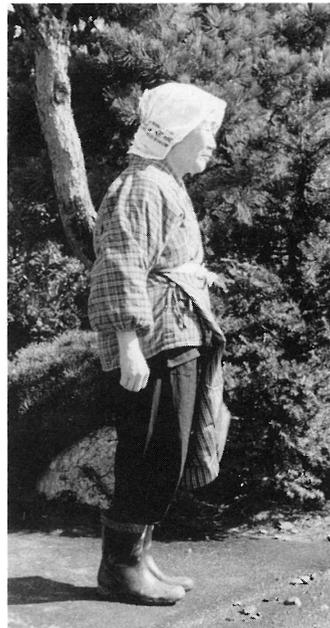


写真10 雨竜地域の標準服（昭和18年頃）



Ⅳ お わ り に

以上、西岡、雨竜地域におけるモンペの調査結果をまとめてみた。

1. 明治20年前後、入植当時から大正初期にかけて男子の山仕事にモンペが穿かれたが、具体的な形態については、聞き取り及び、復元は出来なかった。

2. 両地域ではじめて女子がモンペを穿いた大正中期以降、昭和初期までのものを比較すると、2図に示すように、西岡及び、その近郊ではタツツケ型がはかれている。当地域はさまざまな地域から時間的にずれながら入植して形成されており、このように各々異った母村を持っているにも拘らず、タツツケの形態が画一的にこの地域の人々に用いられた理由としては、福井、富山、石川県などの入植者数が全体の1, 2, 3位と上位を占めている事に基因するともと思われる。しかし呼び方としては、モンペとのみ呼ばれタツツケという方言は継承されていない。

3. 雨竜地域では、図4のような短かモンペが穿かれている。宮本勢助氏「山袴の話」によると、山袴類の調査報告の中に「婦人用は徳島県那賀郡地方、田植時期に用ふるものもあるも、着物下着にてパッチと称し、寸尺短かし」と記されている。パッチは朝鮮語からつけられた語で股引の長い足首までであるものの事を指す。この文献から徳島地方では、田植えの時に着物の下に短い股引きを着用した事が明らかである。これらを総合すると雨竜地区で短かモンペがはかれた理由としては、入植当時、四国、特に徳島県からの移住者が最も多かった事、その後時間的に少しづつずれるが、新潟県、続いて富山県人が次第で増えていった経緯などから、徳島県地方の短かいパッチが、中部地方に多くみられるモンペの型式と徐々に融合され、稲作地帯という地域性とも相俟って、短かモンペの出現をみたのではないかと考えられる。呼称は西岡と同じにモンペと呼んでいるが、一例のみ四国出身者はモンピと称していた。

4. 次に図5、雨竜地域の昭和初期から10年頃のモンペについては、作業着としての定着期間は余り長くないといわれ、また、この時期は富山県出身者が雨竜町の大半を占めていた時代でもあった。明治の末期、富山県入植者が少数の頃から、この村落には富山県人によって獅子舞神楽が伝承されている。この獅子舞衣裳のカルサン（下衣）の中の一つに図5と同型のカクマチが用いられていることは、極めて興味深い事といえる。正倉院に保存されている禪、木曾のカルサン、雨竜の獅子舞の衣裳、更に雨竜の作業着のモンペに同型の襠が重なるのである。

5. 昭和10年から20年前後は、図6、図7のように両地域とも、襠の形は単純化し、殆ど同じ構成になる。特に昭和16年前後から終戦にかけて普及した女子の標準服の着用によって、全国的にモンペ一色という服装史上、特異な時代となり、地域の特徴や出身地とのかかわりは崩壊し、画一的な傾向を示した。しかし西岡地域においては、図8のモンペが着用されている事に注目したい。これは大正期から主に、中部地方で着用されていた「ののダツツケ」の形態である。戦争を前後として、一旦、画一化され途絶えたかに見えた出身地の形態が再びよみがえったのは、この形態の持つ、着ごちのよさ、機能性、型のよさ（格好がよい）などによるもの

であろうか。いづれにしても、西岡地域は、明治の頃から人糞運びという特殊な生業がありそのためか、どの年代においてもモンペの裾は極端にせまく構成されている。雨竜地域の短かモンペとともに、ここに地域的偏差を見る事ができる。

6. 形態の伝承についてみると、山袴からモンペ、タツツケ、カルサンの三種類に大別した型式は、この両地域に限っては、時代の移り変りによる需要の度合は異なるにしてもタツツケ、モンペ型式は作業着の中に、カルサン型式は祭の衣裳の中に残され、入植以来現在に至るまで確実に継承されてきたのである。

本調査も今回は二村落を対象という、狭い範囲で初歩的な段階であるが、今後は各地の実態調査を行い、資料収集とともに本道の衣服の変遷について研究をすすめたいと考えている。

本研究については、日本民俗学会、第36回大会に発表ずみのものである。(1984)

文 献

- 1) 宮良高弘編集：北海道を探る 4 西岡特集，北海道みんぞく文化研究会，1984
- 2) 宮良高弘編集：北海道を探る 7 雨竜特集，北海道みんぞく文化研究会，1985
- 3) 西岡開基七十年部落史編纂委員会：西岡部落史，西岡部落，1958
- 4) 雨竜村史編纂委員会：雨竜村史，雨竜村，1956
- 5) 雨竜町史編纂委員会：雨竜町史，雨竜町，1969
- 6) 宮本勢助，山袴の話，大日本聯合青年団編，1937
- 7) 高橋春子・後藤信子編著：衣の民俗叢書 労働着Ⅰ，明玄書房，1979
- 8) 高橋春子・後藤信子編著：衣の民俗叢書 労働着Ⅱ，明玄書房，1982

(1985・9・10)